



◎特別インタビュー

「安原喜弘文庫」が伝えるもの
～安原喜秀氏にきく

◎特別寄稿

「夕焼めぐり」
清家雪子

◎追悼

追悼佐藤泰正先生
福田百合子

佐藤泰正先生を悼む
中原 豊

◎テーマ展示

「中也の本棚——外国文学篇」

◎特別企画展

「萩原朔太郎と中原中也」

◎企画展

「中原中也賞の20年」
「中也の住んだ町—新宿」

◎新収蔵資料紹介

小林秀雄宛献呈署名入り『ランボオ詩抄』
平岡潤関連資料

◎記念館ニュース

中也忌と秋のイベント4日間「秋の日の夢」
「出会い？ 発見?! 感動!! 中也読本」を発行

主なできごと（平成27年度 行事記録）
第21回中原中也賞受賞作品
平成28年度 行事予定

中原中也記念館 館報2016

21

Public relations magazine
第21号

Chuya Nakahara Memorial Museum



本中に「真剣勝負」ですね。たいがいこの時期は、自分が確かじやないから、受ける方にとつても、きつくて、怖いことです。よだから、身を捨てても「真剣勝負」を受けとめるといことは少ないと思います。中原中也の方は30歳で人生を生ききったという感じだけでも、父の方はその歳を越えても生きていましたので、そのあとが大

——中也は手紙を通して文学を語ったり、詩を同封したりすることもありました。中には喜弘さんを「沈黙家」と呼んで、（もつと苦情を云つて欲しい。察しだけで話が始まるとは思へない）（昭和10年4月29日）などと厳しい言葉で書かれたものもあり、その真剣さが伝わってきます。

中也は思いついたらメールをするようにすぐ書いて投函する。ただ、あれだけ自分の思いを文字に託して言うのは、今なかなかないですね。形としては、メールと同じなんだろうって言われるけれども、その「軽さ」みたいなものはないですね。

「安原喜弘文庫」が伝えるもの 安原喜秀氏にきく

特別インタビュー Special Interview 2016



安原喜秀氏（旧宅の柱、梁、天井材、板戸、壁材などを再利用してつくられた桜樹庵にて）

撮影：北澤社太

中原中也は友人たちに多くの手紙を書き送っていますが、現存しているものの中で一番多いのが、友人安原喜弘氏に宛てた手紙です。

この度、安原喜弘氏とそこご遺族によって大切に保存されてきた中也の書簡原稿・遺品全127点が山口市に寄贈され、平成25年に寄贈された安原家旧蔵の書籍・レコードその他とあわせ「安原喜弘文庫」として中原中也記念館に収蔵されることとなりました。

これを記念して、安原喜弘氏の「子息・安原喜秀氏に、中也の資料に対する思いや、ご両親の思い出話などをお伺いしました。聞き手 学芸担当 原明子」

手紙から見えてくるもの

——中原中也が安原喜弘さんに送った手紙は、現存するものだけでも100通を超えます。それを保存してこられたご遺族として、どのようなところを見て欲しいとお思いでしょうか？

書かれた手紙の内容は活字になっていきますので、随分知られていると思うんですが、けれども、本物の手紙をみると、だめなところとかは消しちやったり、書き直したりとかして、そこに息づかいが感じられる。そういうのを見ると、やはり活字にされたテキストとは違っていろんな読み方ができるのではないかなと思います。

から頼みに行くというのはとても苦手で、人と争うことが大嫌い。世の中では、この人、大丈夫かなって思う。

でも結局、最後はこういう人が一番強いのかと思ってたりするんです。皆さんが助けてくれるんです。父は中原中也を放っておけなかったけど、逆に周りには父を放っておけない。就職もやつと関口隆克さんのお声掛けりでできたりして、助けられた。そういう、周りの人が手を差し伸べたくなるようなやさしさを持った人だったんです。

父・喜弘さんの蔵書、母・千枝子さんのレコード

——平成25年には、安原喜弘さんの蔵書もご寄贈いただきました。お父様の蔵書について教えてください。

父の蔵書には、専門家が読むような船の本とか飛行機の本とかそういうものもあって。文芸的なものというのはいくらも目につかなかったですね。父がこつちに引越してきて家を作ったときも、何しろ七坪半ですから、父の本は外の軒下に積んで、雨に濡れないように何かかぶせてたつていうのを覚えてる。だからすぐ痛んじやう。逆に自分が非常に大事にしている本は、寝室の小さい本箱に入れて……それが中原中也の関係の本とか、もらった本とかなんです。

もう一つ、今までこの手紙は、中原中也の日々の足跡をたどっていくための研究資料という感じだったんですが、それだけではなくて、安原喜弘と中原中也との関係を通して、人間・中原中也というものが随分見えてくる。一人の人間として付き合つて、何で安原喜弘という人にあれだけ手紙を出すぐらいに惹かれていたのか、そこを考えることもまた文学的なことなのではないかと。そんな機会がこれからつくられていくと思います。

真剣勝負

——安原喜弘さんと中也が出会ったのは昭和3年。当時の喜弘さんは成城高校で文芸同人誌や劇団などで活躍する高校生。一方の中也は、周りに才能を認められてはいたけれど、なかなか自作の発表の場がない気鋭の詩人でした。

中也が30歳で亡くなるまで交友は続きましたが、ちょうどその時期は二人とも20代にあたります。若い二人の関係をどうご覧になりますか？

20代の、自分のこれから歩んでいこうとする人生をどういう風にしていこうかまったく決まらない……悶々としていて思うんですが、そういう二人の関係は、単なる友達というものではないと思います。今のようにメールもできないし、電話も思うようにならない中で、中原



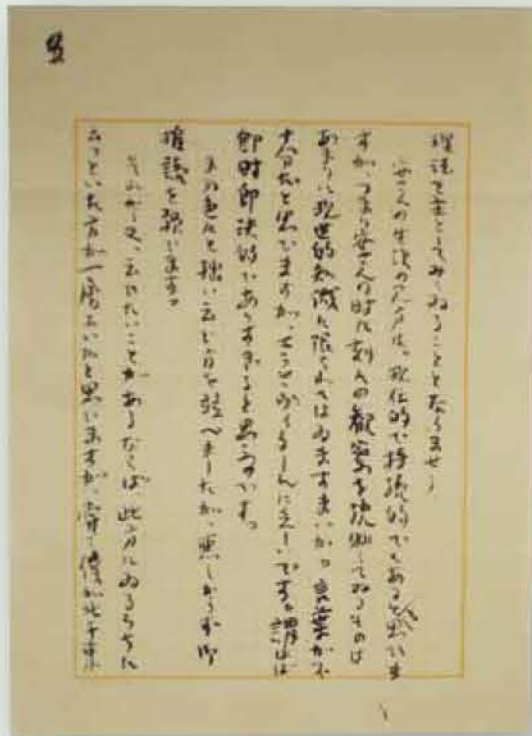
玉川学園の自宅（東京・町田市） ©Takashi YAMAGISHI（平成25年7月撮影）

戦後に引っ越してきた七坪半の家。安原喜弘氏が設計した。残念ながら現在は残っていない。

それと、父は玉川大学出版部にいて百科事典を編集していたんです。事典って偉い先生の名前が入っているんだけど、実は編集者がほとんど書いていくんですよ。それで、自分で調べたり、それから先生の所へ行つて訊いてきたりつていうことをしていた。ジャンルでいくと、美術・芸術関係が中心。そういう関連の本は結構ありましたね。

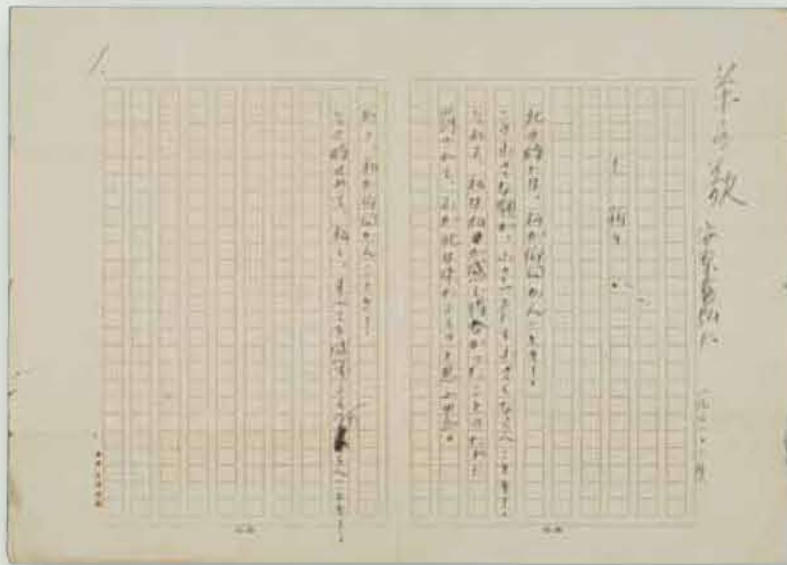
——ご寄贈いただいた資料の中には、SPレコードやコンサートのプログラムなどもたくさんありますが、それはお母様の千枝子さんのものが中心だそうです。ご両親と一緒にコンサートに行かれることもあったのですか？

母は昭和14年に父と見合いをして、15年の5月に結婚して、16年の3月に僕が生まれるんだけど、いわゆる「お見合



安原喜弘宛中原中也書簡
(昭和12年10月5日) [全6枚のうち3枚目]

中也が生前最後に書いた手紙。投函されずに残っていたものを母・フクによって安原の元に届けられた。当時の中也は心身共に衰弱しており、後半には、安原が自分に疑念をいだいているのではないかという一方的な強迫観念が赤裸々に述べられている。



中原中也 原稿「羊の歌」(昭和6年2月制作) [全5枚のうち1枚目]

安原喜弘宛の献辞が付された詩。安原は「中原中也の手紙」の中で〈永い間の約束であった私への贈り物の詩〉と述べ、後年、大岡昇平宛の書簡では〈昭和六、七年と京都では肌身離さずもち歩いていた〉と記している。



【安原喜弘】 Yoshihiro YASUHARA

明治41年東京生まれ。京都帝国大学文学部卒業。女学校の教師、玉川大学出版部勤務のほか、文学、美術史、演劇などに携わる。昭和3年、中原中也を知る。翌年、中也、大岡昇平らと同人誌「白痴群」を創刊。京大進学後は中也と頻繁に文通。昭和6年、中也から詩「羊の歌」を贈られる。昭和7年、中也の故郷山口を訪れる。昭和7～9年、詩集「山羊の歌」出版のため奔走。中也の死後、中也からの手紙をもとに「中原中也の手紙」を執筆する。

【安原喜秀】 Yoshihide YASUHARA

安原喜弘の長男として東京に生まれる。東京大学工学系大学院博士課程修了。日本で最初に居心地学を提唱。居心地研究所代表であり、東海大学大学院人間環境学研究科客員教授。研究家・文筆家・建築コンサルタントとしても活躍する。著書に『大都会の小さな家―住の思想へ』（筑摩書房）など。



安原喜弘『中原中也の手紙』
(昭和25年11月 書肆ユリイカ刊)

安原喜弘の手元に遺された約100通の中也の書簡と詩を、安原自身の証言を織り交ぜながら、年代順に紹介した著作。昭和15年12月から同人誌「文学草紙」に「中原中也の手紙」として連載されたが、同誌の廃刊によって中断を余儀なくされた。戦後その稿を書き継いで、昭和25年11月に単行本『中原中也の手紙』として書肆ユリイカから出版。その後も増補版、文庫版などによって読み継がれている。

父は晩年モーツァルトが好きでしょっちゅうかけてました。中原中也が生きていた頃は、電蓄もありましたから、ベートーヴェンとかいろんな音楽を聴いてたはず。一緒に第九を聴いたという話も残っているんですけど……どちら

も、山の中から、インフラが何にもない。電気、ガス、水道、下水道、全部ない。まず、電気がないのでびびりました。周りには家は全然なくて林ばかり。だから、いろんな虫とか、蛇とか、鼠とかが家の中にも入ってくる。トイレに蛇が入っていたりして、母はもう絶叫してた。中也の手紙はいつ虫が喰ってもおかしくないわけ。今のようになちゃんと管理した部屋ではないから、母はその手紙に虫がつかないかってことばかり気にしてた。

戦争中、父は手紙を肌身離さず持っていました。大事な物として。ずっと後になつて知るんですけど、中原中也の手紙は、別の封筒に一つ一つ入れてまたそれを新しい大きな封筒に入れて、それをまたまとめて海苔の缶のようなものに収めて保存していました。そんな缶があったっていうのは記憶があるんです。戦後は母の縁を頼って借金をして、本当にわずかなお金で玉川学園のそばの、この山の中の土地を手に入れた。そこに

でも、山の中から、インフラが何にもない。電気、ガス、水道、下水道、全部ない。まず、電気がないのでびびりました。周りには家は全然なくて林ばかり。だから、いろんな虫とか、蛇とか、鼠とかが家の中にも入ってくる。トイレに蛇が入っていたりして、母はもう絶叫してた。中也の手紙はいつ虫が喰ってもおかしくないわけ。今のようになちゃんと管理した部屋ではないから、母はその手紙に虫がつかないかってことばかり気にしてた。

母は、ただもう黙ってた。中原中也と一緒にいて、極端に言えばそのままだけでもいいや、自分と一緒に死んでもいいっていう感覚を持っていたと思います。ただずつと手紙と一緒にいたい、そういうことだったんじゃないかなと思います。本人からすれば、役に立つとかではなくて、それ取っちゃったら自分がどこから出てきてどこへ行くんだろう、ということとさえ見通しがつかないんだろうという感じがするんですよ。

(平成28年1月24日 安原喜秀氏宅にて)

い恋愛」で、結婚まで1年足らずです。父は関西にいたのでそのときのラブレターが残ってしまってる、それを母は生涯大事に持っていた。遠距離恋愛でもあったので、一緒にクラシックのコンサートに行くなんてことはなかったと思いますよ。

母は下町のすぐ近くで育って、子どもの頃に三味線と琴を習わされて、自分の性に合って、これだっというの三味線だったんです。そこで聴いた活きのいい音、リズムにすごく共鳴するっていうところがあった。戦前にクラシック音楽を聴いていましたが、それだけでは我慢できないようなものが流れているんです。それがリズムなんです。だから、記念館に寄贈した母のレコードにはダンス音楽もたくさん入っている。

七坪半の家——八畳一間、あとは二畳が二間に納戸とトイレがちょこっとついて、いるだけの家をつくって、ああ我が家だーって、そういうところから戦後がはじまるわけです。

母は、ただもう黙ってた。中原中也と一緒にいて、極端に言えばそのままだけでもいいや、自分と一緒に死んでもいいっていう感覚を持っていたと思います。ただずつと手紙と一緒にいたい、そういうことだったんじゃないかなと思います。本人からすれば、役に立つとかではなくて、それ取っちゃったら自分がどこから出てきてどこへ行くんだろう、ということとさえ見通しがつかないんだろうという感じがするんですよ。



清家雪子
comic artist = Yukiho SEIKE

夕焼めぐり

特別寄稿 Special contribution 2016

Profile
【清家雪子（せいか ゆきこ）】
月刊漫画誌アフタヌーン四季賞の平成12年夏のコンテストにて大賞受賞。平成22年5月から同誌にて『秒速5センチメートル』で連載開始。平成23年12月から初のオリジナル作品『まじめな時間』を連載開始。実力派として評価を固める。『月に吠えらんねえ』を現在同誌にて連載中。

Comic
『月に吠えらんねえ』
「作品の漫画化（コミカライズ）」でも、「実在した詩人の自伝」でもなく、「作品そのもののイメージを人格化し、キャラクター（登場人物）として命を与えた」という設定で、ふんだんに近代詩や随筆など作品そのものを紙面に登場させるその独自性で話題を呼んだ漫画。

舞台は、詩人・俳人・歌人たちが暮らす架空の街「シカク」詩歌街。
そこには中原中也、萩原朔太郎、北原白秋、三好達治、室生犀星、与謝野晶子、斎藤茂吉、若山牧水、高浜虚子、石川啄木、立原道造、高村光太郎、正岡子規らの作品からイメージされたキャラクターたちが、創作者としての欲望と人間としての幸せに人生を引き裂かれながら、絶望と歓喜に身を震わせ、賞賛され、非難され、創作にまい進する。物語は戦争に突入し、近代詩を語る上で避けることができない戦中詩を今まで漫画では扱われたことがないアプローチで描き高い評価を得た。現在月刊漫画誌アフタヌーンで連載中。



中原中也「夏の夜の博覧会はかなしからずや」より

【作者より】
『月に吠えらんねえ』という漫画の登場人物は近代詩歌人の作品から受けた印象をキャラクター化した、というやらしい設定でして、「チューヤくん」は中原中也氏その人ではなく、私が中原中也作品から感じる印象を結晶化した存在です。イメージ源としては『山羊の歌』期が中心になっているので、『在りし日の歌』期作品の印象はチューヤくんにはほとんど反映されていません。
一方で、中也作品の中で個人的に五指に入るのが『夏の夜の博覧会』はかなしからずやです。
室生犀星の「立原道造を哭す」最後の「わよ、わよ。」と同様抗わずに降参するしかない感動です。あまりに感傷的に過ぎるし、「文也の一生」を前提とした感動だとも思います。しかしこの有無を言わせぬ感情伝達力は漫画には、おそらく小説や絵画にもないだろうなあ、あるいは音楽ぐらいたろうなあ、やっぱ詩歌句はすごいなああと改めて嬉しくなっています。中也作品にはそんなふうに、悔しいけど降参せられてしまうことが多いです。



追悼

当館の運営協議会委員や展示検討委員として記念館を支えてくださった佐藤泰正氏が、平成27年11月30日にお亡くなりになりました。佐藤氏は、梅光女学院大学（現梅光学院大学）の教授や学長を歴任されるかたわら、日本近代文学の研究者として、中原中也をはじめ夏目漱石や宮沢賢治の研究に尽力されました。『中原中也という場所』、『佐藤泰正著作集』（全12巻別巻）など多くの著作があるほか、編著に『中原中也を読む』などがあります。

また、当館主催の講演会※で何度も講師を務めていただいたほか、中原中也の会の会の理事や中原中也賞の選考委員を務められるなど、記念館の発展や中原中也の研究・顕彰になくてはならない方でした。心から哀悼の意を表します。

追悼佐藤泰正先生

福田百合子（当館名誉館長）

佐藤先生の訃報に接し、一つの大きい時代の終りを覚えました。先生とのご縁は週れば古く遠い昔のようにも、不思議に近い最近のことのようにも、新しく、いきいきと思ひ出されるのです。

その頃、梅光女学院大学気鋭の若手教授としての先生は、たゞまぶしいばかりの存在でした。KRY山口放送局のロビーで初めてお目にかかり、中原中也や近代文学について広くお話をうかがうことができました。ラジオ放送に、「一緒にさせていたゞく折も多かったのです。熱意



ご自宅にて（平成22年2月）

溢る、語り口に、圧倒され続けました。この気迫は、後年中原中也記念館や中原中也の会でも変わることなく、私たちに大切な学恩として常に届けられたのです。中也記念館開館に際し、当時の副館長と共に下関のご自宅へご挨拶に参上した時の光景が忘れられません。絵筆を手にしたまゝの明るい表情の女性「ヤスマサさん。お客様です」と大きい声で、書斎にお籠り中の先生を呼んでくださいました。「ホーイ」と出てこられた先生。ヤスマサさんと呼ばれた方をお妹さんかと思ひましたら、ご夫人でした。このようなお二人を目のあたりにし、本当に羨しく、ほのぼのと暖い気持ちになりました。

帰り際にご夫人の秋草の絵を一枚いただきました。おいとました玄関の前方に桜並木が開け、正に咲き満ち、匂い溢れていました。私たちは、つい「タイセイ先生」と呼んでいましたが、今は正確に「ヤスマサ先生」とお呼び出来ます。先生は最後まで、いつも、きちんと真実に向い続けられる方でした。ご恩に感謝し、安らかな眠りを祈りつゝ。

佐藤泰正先生を悼む

中原豊（当館館長）

佐藤泰正先生に初めてお会いしたのは大学院生の頃だった。中原中也研究の先達として仰ぎ見るような存在であったが、先生はごく親しく接して下さり、その知識の広さや深さ、作家や作品の本質を見抜く慧眼、情熱的な語り魅了された。学会の質疑応答や懇親会などで交わされる議論において、先生はまず論者や対象作品を肯定するところから入られるのが印象的だった。それは先生の研究の根底に文学を通じて人間とは何かを問う普遍的で形而上学的なテーマが息づいていたからであるし、その心の内に常に（他者への深い共感があつたからだと思われる。

中原中也記念館に勤めるようになってから、記念館の運営協議会委員長として、中原中也賞選考委員としての先生を知ったが、その姿勢はどんな場でも変わらなかった。運営委員会は記念館の事業の内容や計画などについてご意見をうかがう場であるが、それに加えて、先生は他の委員の方々と中也をめぐるお話を楽しげに展開されていた。

中也生誕百年にあたる平成19年に記念館でお願いしたご講演の録音を改めて聴

いた。後にご著書『中原中也という場所』（思潮社）に「中原中也と小林秀雄——その対峙・相関を軸として」として文章化された内容だが、北村透谷から芥川龍之介、八木重吉などの作家にも及び、文学を通じて人間存在の本質を問いつける言葉で結ばれる内容だった。2時間20分におよぶお話の中で、今、胸に深く沁み入っているのは、中也の『曇つた秋』の（君と僕との命はかぎり）という一節について、本来は「篝火」の「篝る」だが、糸で結びつける「縋る」とも読むことができると言われたことである。

先生が発し続けた問いとそれに傾けた情熱は、文学を愛する人々の心を最も深いところで結びつけるものであり続けるだろう。公私ともに先生からいただいた学恩に心から感謝申し上げます。

※中也賢治「山頭火」その生命律をめぐって（平成16年9月29日）、「中原中也をどう読むか」（日本近代詩と宗教性）の問題をめぐって（平成17年10月1日）、「中原中也と小林秀雄——その（宗教性）のゆくえをめぐって」（平成19年8月9日）など。

【新収蔵資料紹介】

小林秀雄宛献呈署名入り『ランボオ詩抄』

昭和11年6月25日 山本書店



平成27年11月、小林秀雄宛中原中也献呈署名本『ランボオ詩抄』を、小林秀雄のご遺族より受贈しました。

『ランボオ詩抄』は中也にとって2冊目の翻訳詩集です。造本は四六半裁判62頁。アルチュール・ランボオの韻文詩が17篇収録されています。昭和9年から10年にかけて、中也は建設社から刊行予定の『ランボオ全集』（全3巻）へ収録するために、ランボオの韻文詩の翻訳を続けていました。しかし、出版の話そのものが頓挫し、まとめて発表するあてが無くなってしまったところ、山本書店より新しく刊行される文庫版翻訳廉価本シリーズの「山本文庫」に、その翻訳の成果を生かすことになったというわけです。ただでさえ中也の署名本は数が少なく、ましてや、中也と長年にわたり交流があり、ランボオ詩の翻訳者でもある小林秀雄との関

係がうかがえることから、大変貴重な一冊といえます。小林のご遺族により偶然発見された時には、すでに表紙が脱落し、扉頁に毛筆で書かれた署名部分が露わになった状態でした。本は第3刷（昭和11年6月27日発行）が使用されています。なお、この詩集は平成28年2月から4月にかけて開催された「山口お宝展」（山口商工会議所主催）において期間限定で初公開されました。

平岡潤関連資料



戦前の中原中也賞を受賞した詩人・平岡潤のご遺族から平岡潤に関連する資料19点をご寄贈いただきました。平岡は『詩集 茉莉花』で第3回中也賞を受賞していますが、この賞は現在のものとは異なり、中也を追悼するという意図のもと、昭和13年から実施されたものです。中也の知人の中垣竹之助が出資し、雑誌「四季」が創設したもので、新鋭詩人の詩作品が対象でした。しかし、中垣の事業悪化により第3回で終わりを迎えたため、平岡が最後の受賞者となりました。なお、資料の詳細な内容は以下の通りです。

○直筆原稿（計2点）

平岡潤原稿「短歌覚書 第壹冊」、「短歌覚書 第貳冊」（昭和10年代 推定）

○書籍・雑誌（計5点）

平岡潤「詩集 茉莉花」（私家版、近藤李・平岡潤編「桑名の伝説・昔話」（桑名市教育委員会）、『桑名の文化——平岡潤遺稿』平岡潤遺稿刊行会、五木寛之「こころの天気図」（講談社）、雑誌「みつゑ」7月号（第40号）（昭和13年7月 春鳥会、平岡潤画「構成」掲載）

○絵はがき（計1点）

「自由美術家協会第二回展出品 構成 平岡潤」（昭和13年頃）

○新聞（計5点）

平岡潤関連新聞切り抜き（毎日新聞 昭和53年4月16日 ほか）

○写真（計6点）

平岡潤肖像等写真5点、平岡潤画薊の花の油絵（コピー）1点

今回寄贈を受けた『詩集 茉莉花』は、限定120部のうち番号が0番で、函、背表紙などに赤字で「保存用」と書かれていることから、著者保存用と考えられます。

7月1日から26日の期間、企画展「中原中也賞の20年」の中で戦前の中原中也賞受賞者として特別展示を行いました。

【平岡潤（一九〇六—一九七五）】

三重県桑名市生まれ。明治大学商学部卒業後、陸軍に入隊。昭和11年頃から「四季」などに詩を投稿しはじめる。また、絵画にも才能を発揮し、自由美術家協会第一回展で協会賞を受賞。昭和17年、詩集『茉莉花』で第3回中原中也賞を受賞。戦後は桑名市の郷土史研究に尽力する。昭和45年より桑名市立文化美術館現・桑名市博物館の初代館長を務めた。



平岡潤（詩集『茉莉花』口絵より）

中原中也とは東京外国語学校などでフランス語を習得し、ランボーの翻訳詩集を刊行するなど、終生、フランス文学に強い関心を持ち続けました。また、中也はそのほかにも、ロシア、ドイツ、イギリス文学などの多様な外国文学を読み、詩人としての文学的素養を育んでいきました。読書家の中也が残した日記や手紙には、読んだ本のタイトルや感想が数多く記されています。

本展では、中也が読んだ本を通じて、中也と外国文学の関わりについて紹介しました。

平成28年2月24日(水) - 平成29年2月12日(日)

William Shakespeare

ARTHUR RIMBAUD

Rainer Maria Rilke

第13回 テーマ展示

中也の本棚 ——外国文学篇

Paul Verlaine

Антон Чехов

Edgar Allan Poe

Heinrich Heine

中也はフランス語を学ぶために、アテネ・フランセ、東京外国語学校に通い、独学でも勉学に励みました。最晩年の昭和12年には関西日仏学館通信講義を受講し、亡くなる直前までフランス語への情熱が消えることはありませんでした。

展示1では、中也が外国文学に影響を受けたフランス語について紹介しました。

けたフランス語について紹介しました。

〈主な展示資料〉
中原中也草稿「詩的履歴書(我が詩観)」、草稿「秋の愁嘆」、「ボン・マルシェ日記」、高橋新吉「ダダイス ト新吉の詩」、「上田敏詩集」、鈴木信太郎訳「近代仏 蘭西象徴詩抄」、ジュブスケ「実用日仏会話」初等 仏蘭西語独修書」

「展示1」外国文学への扉

中也は中学時代、友人の詩人・富永太郎から、ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボーに代表されるフランス象徴詩を学びます。当時ダダイズムの影響を強く受けていた中也にとって、フランス詩との出会いは新たな文学への扉でもありました。



「展示2」フランス詩と中也

中也は生涯に3冊のランボー翻訳詩集を刊行したほか、ネルヴァル、ラフォルク、デボルド・ヴァルモールといった当時の日本ではあまり知られていない詩人の翻訳にも取り組みました。また、中也が心酔したヴェルレーヌやランボーの影響は、作品の中にも表れています。

展示2では、中也と最も関わりの深いフランス詩について紹介しました。

〈主な展示資料〉

中原中也翻訳草稿「ネルヴァル」黒点、「ヴェルレーヌ」木馬(以上「フット翻訳詩」)、ランボー「感動」、「日記雑記帖」、中原中也訳「ランボオ詩集」(学校時代の詩)、「ランボオ詩抄」(ランボオ詩集)、川路柳虹訳「ヴェルレーヌ詩集」、「ヴェルレーヌ／河上徹太郎訳」(観智)

「展示3」中也の詩と外国文学

中也はフランス文学以外にもロシア、ドイツ、イギリス、アメリカ文学など、多様な外国文学を読み、詩人としての素養を育んでいきました。中也の日記や手紙には、読んだ本が数多く記されており、中也が実際に読んだ本の多くを今日知ることができます。

展示3では、中也が読んだ本の数々と、それらに関連した中也の詩を紹介しました。

〈主な展示資料〉

中原中也草稿「朝の歌」、「新文芸日記」、鎌倉の家で使用していた本棚、「近代劇大系」第8巻「坪内逍遙訳」新修シエークスピア全集(全40巻より)、昇曙夢訳「チエーホフ傑作集」、茅野蕭々訳「リルケ詩抄」、伊藤喬信訳「ボオ全詩集」、「スルヤ」第2巻、「生活者」第4巻第8号





特別企画展

萩原朔太郎と 中原中也

平成27年7月30日[木]ー9月27日[日]

萩原朔太郎は中原中也より21歳年長で、詩集『月に吠える』で口語自由詩を確立した人物として、中也が詩人を志した頃にはすでに詩壇でその名を知られた存在でした。ふたりは幾度か会合で同席した程度の交流しか持ちませんでしたがお互いを評した文章や、ふたりの交流を示す資料をた

どっていくと、詩人としてお互いを気にかけていた姿が浮かび上がってきます。

本展では、詩のほかに音楽・写真・デザインなどにも才能を発揮した朔太郎の多様な個性と魅力を紹介するとともに、朔太郎と中也の詩の特性に迫りました。

(協力 水と緑と詩のまち 前橋文学館)

【展示3】 朔太郎と中也

朔太郎は中也の印象を「懐中に短刀を入れたる子供の図」(『詩壇の新人』)と記したほか、中也について言及した評論をいくつか残しています。中也が朔太郎について言及した評論は一篇しかありませんが、その中で中也は「氏のエッセイはとみると、時にダツ子みたいに感じられる時がある。蓋し淫酒のせるである。而してその淫酒は、氏の詩人としての孤独のせるである。」(『萩原朔太郎評論集 無からの抗争』)と述べています。

展示3では、朔太郎と中也の接点やお互いを論じた評論などから、ふたりの間にあった共感の秘密を探りました。

【展示4】 ふたつの詩情

展示4では、4つのテーマ「月」「蝶」「オノマトペ」「ふるさと」について、朔太郎と中也が同じモチーフを扱った詩を対比し、それぞれの表現の特徴や感性に迫りました。

○紹介した詩 朔太郎「月光と海月」「月夜」「猫」「帰郷」中也「湖上」「一つのメルヘン」「サーカス」「帰郷」

【展示5】 ムットーニシアター ——からくり劇場による朔太郎と中也

動き出す人形と音楽、光が織りなすからくり劇場により、独自の作品世界を生み出す現代美術家、ムットーニ(武藤政彦)氏。本展開催を機に、中也の詩「地極の天使」をモチーフにした新作「アトラスの回想」が誕生しました。

展示5では、この「アトラスの回想」と朔太郎の小説をモチーフにしたからくり劇場「猫町」を展示・上演しました。また、会期中にはムットーニ氏ご本人の口上による上演会を開催しました。

《主な展示資料》

○萩原朔太郎関連資料
草稿「くさつた蛤」(九月の探偵(殺人事件)「珈琲店酔月」「自転車日記」「月光と海月」(習作集第九巻)、自筆住所録・楽譜「月に吠える」無削除本・削除本、撮影写真、遺品(ソフト帽靴、横笛、指揮棒)

【展示1】 出発点——抒情の源

朔太郎と中也は、ともに医者の子長男として生まれました。少年時代は、親の期待を背負いながらも短歌に熱中し、中学校を落第するなど、ふたりの境遇には似通う点が多くあります。

大正2年、朔太郎は、北原白秋と室生犀星から強い影響を受けて詩を書くようになり、詩壇デビューを果たします。一方、中也は大正12年、転校のために移り住んだ京都で、ダダイズムやフランス象徴詩を知り、本格的な詩作を始めます。

展示1では、朔太郎と中也の文学的出発点を紹介しました。



【展示2】 朔太郎の世界

大正6年、朔太郎は第一詩集『月に吠える』



朔太郎宛献呈署名が入った中也訳「ランボオ詩集」(個人蔵)



ムットーニ「アトラスの回想」(9月26日の上演会)

る」を刊行。詩壇から高く評価されたこの詩集で、日本における口語自由詩を確立しました。以後、「青猫」「純情小曲集」「氷島」などの詩集を刊行し、詩人としての名声を高めていきます。その中で「氷島」は、文語を用いた作品に対して評価が大きく分かれるなど、詩壇に論争を起しました。

展示2では、詩のほかにアフォリズム、評論、エッセイといった分野でも活躍した朔太郎の主な業績を紹介しました。また、音楽、写真、手品などの趣味を持ち、著書の装幀や自宅の設計までこなした朔太郎の多彩な個性と魅力を、「朔太郎の横顔」と題したコーナーで紹介しました。



○中原中也関連資料
草稿「春の夕暮」(ノート1924)、「湖上」(ノート小年時)、「日記(雑記帖)」(ボン・マルシェ日記、安原喜弘宛書簡昭和5年5月9日付)、中原中也訳「ランボオ詩集」(萩原朔太郎宛献呈署名本)



協力館の前橋文学館との共通ロゴマーク。会期中は猫と帽子を別々に押す記念スタンプも登場し、好評を博しました。

前橋文学館特別企画展 中原中也と萩原朔太郎

平成27年10月17日(土)ー11月29日(日)
協力・中原中也記念館

朔太郎の故郷・群馬県前橋市の前橋文学館において、特別企画展「中原中也と萩原朔太郎」が開催されました。昭和12年2月、前橋での萩原朔太郎歓迎会のため、朔太郎に同行するメンバーとして中也も候補に挙がっていましたが、当時中也は神経衰弱を患っており、前橋を訪れることはありませんでした。生前叶わなかった前橋行きが実現したかのよう今回の企画展。中也の生涯や詩業を紹介する資料も多数展示され、中也を知っていたく好機となりました。



中原中也賞の20年

平成27年4月15日(水)～7月26日(日)



外でも活躍してほしいという願いがこめられたものでした。第11回からは中也のポートレートとなりましたが、世界へ羽ばたいてほしいという願いは変わらぬままです。

ここでは、中原中也賞創設の経緯や中原中也賞の歴代選考委員について紹介しました。



2 中原中也賞を受賞した詩人たち

新鮮な感覚を備えた、優れた現代詩の詩集に贈られる中原中也賞。この賞が、平成27年に20回目を迎えたことを記念し、中原中也賞の歴代の受賞詩人や選考委員を紹介しました。

本展では、受賞詩集に収録されている作品や受賞詩人によるアンケート回答を交えながら、20人の詩人それぞれが持つ豊かな個性と魅力的な詩の表現を味わっていただきました。

これまで多くの詩集に与えられてきた中也賞ですが、受賞者の性別や年齢、職業などは様々です。ここでは、第1回～第19回の中也賞を受賞した詩人たちを、プロフィールや受賞作品とともに紹介しました。また、本展開催にあたって、受賞者本人にアンケートを実施し、その回答を展示。それぞれの詩人たちがもつ個性を直に感じていただきました。

3 第20回中原中也賞 読書コーナー

記念すべき第20回の中也賞は、岡本啓氏の詩集「グラフィティ」に贈られました。ここでは、岡本氏からお借りした詩集のサンプル版や受賞のことばを展示し、詩集の魅力と受賞者の人となりについて紹介しました。

戦前の中原中也賞 第3回受賞者
平岡潤資料特別展示
平成27年7月1日(水)～7月26日(日)

中原中也賞は、現在のものとは別に、戦前にも行われていました。この特別展示では、平成27年5月、ご遺族から平岡潤の関連資料を寄贈いただいたことを記念して(詳しくは10ページの「新収蔵資料紹介」を参照)、戦前の中原中也賞と第3回の受賞者である平岡について紹介しました。

詩集名	出版社	受賞者氏名
第1回 『夜の人工の木』	霧工房	豊原 清明
第2回 『もしくは、リンドバグの煙』	思潮社	長谷部 奈美江
第3回 『ブルックリン』	青土社	宋 敏 鐘
第4回 『AFTER』	思潮社	和合 亮一
第5回 『いまにももうおいていく陣地』	紫陽社	蜂飼 耳
第6回 『釣り上げては』	思潮社	アーサー・ビナード
第7回 『びるま』	私家版	日和村 聡子
第8回 『火よ!』	書肆山田	中村 恵美(神泉 薫)
第9回 『昼も夜も』	ミッドナイト・プレス	久谷 雄 雄
第10回 『オウバアキル』	思潮社	三角 みづ紀
第11回 『音速平和 sonic peace』	思潮社	水無田 気流
第12回 『みちのく鉄砲店』	私家版	須藤 洋平
第13回 『グッドモーニング』	思潮社	最果 タレ
第14回 『先端で、さすわ さされるわ そらええわ』	青土社	川上 未映子
第15回 『適切な世界の適切なならざる私』	思潮社	文月 悠光
第16回 『生首』	毎日新聞社	辺見 庸 庸
第17回 『ウィルスちゃん』	思潮社	晩方 ミセイ
第18回 『谷間の百合』	書肆山田	細田 傳造
第19回 『指差すことができない』	アナグマ社	大崎 清夏
第20回 『グラフィティ』	思潮社	岡本 啓

【中原中也賞受賞詩集一覧】(第1回～20回)

〈主な展示資料〉
中原中也賞リーフレット、中原中也賞受賞詩集の英訳本、受賞詩人直筆の色紙(長谷部奈美江、宋敏鐘、和合亮一、蜂飼耳、中村恵美、久谷雄、三角みづ紀、水無田気流、須藤洋平、川上未映子、文月悠光、豊原清明)『句集父子』、最果タレ詩集『死んでしまふ系のぼくらに』、辺見庸詩集『眼の海』、晩方ミセイ詩集『ブルーサンダー』、細田傳造詩集『水たまり』、大崎清夏詩集『地面』、岡本啓『グラフィティ』表紙サンプル、平岡潤詩集『茉莉花』、平岡潤原稿『短歌覚書』(以上、数略)

中也の住んだ町ー新宿

平成27年9月30日(水)～平成28年4月17日(日)

中原中也は、山口中学校を落第し、京都で一人暮らしを始めた15歳から、亡くなるまでの15年間に、27回引っ越しをしました。平均するとおよそ半年に一度住居を変えた計算になるわけですが、その中で、比較的長く暮らしたのが、新宿駅周辺の町です。昭和5年から6年にかけては、新宿駅の南側、現在の代々木二丁目周辺に、そして、昭和8年末から12年始めにかけては、新宿駅の東側、現在の新宿一丁目および住吉町に住んでいました。

本展は、新宿駅の東側に住んでいた約3年間にスポットを当て、そこで起きた出来事やつくられた作品、新宿が育んできた独自の文化について、2期に分けて紹介しました。

前期(9月30日～12月27日)
花園アパート時代(中也26～28歳)
後期(1月5日～4月17日)
市谷谷町時代(中也28～29歳)

展示Ⅰ 新宿時代の中也

昭和8年12月、26歳の中也は20歳の上野孝子と結婚。それを機に四谷区花園町(現・新宿区新宿一丁目)の「花園アパート」に転居し、新たな生活を始めます。翌年10月には長男・文也が誕生。12月には長年の念願だった第1詩集『山羊の歌』を刊行しました。

昭和10年6月、中也一家は孝子の大叔父であり中也にとっても遠縁にあたる中原岩三郎邸の離れに転居します。岩三郎邸は新宿に近い市谷谷町(現・新宿区住吉町)にあり、時には親子3人で新宿へ買い物にでかけたりもする、平和な日々を送りました。

しかし、昭和11年11月に文也が2歳の短い生涯を閉じると、中也は心身ともに疲れ果て、病院に入院。退院後間もなく、文也との思い出が色濃く残る市谷谷町の家を離れ、鎌倉に転居しました。

展示では、当時の中也に起きた出来事を時系列で紹介するとともに、その頃発表した詩を、原稿や初出雑誌などと併せて展示しました。

〈主な展示資料〉

中原中也草稿「去年の秋の手紙」「月下の告白」「曇った秋」「玩具の賦」「青山二郎」「山羊の歌」装幀図案、雑誌「青い花」、中原中也仏蘭西語個人教授広告、表札(鎌倉で使用)

展示Ⅱ 新宿が育んだ芸術文化

江戸時代に甲州街道の宿場町として始まった新宿の町は、関東大震災後の復興とともに大きく発展しました。中也が新宿近辺に住んでいた頃には、駅から続く大通りには映画館やデパートが軒を連ね、夜は200店以上の屋台が通りに並びました。そして、紀伊國屋書店や中村屋のような個性的な店から文化が生まれ、新宿の町とともに育まれていきました。

そのような当時の新宿の町の様子と中也との関わりについて一目でわかるように、昭和初期の新宿駅付近の様子がよくわかる「新宿盛り場地図」(新宿歴史博物館製作)に、中也が利用していた商店などの情報を加えて展示しました。また、芥川龍之介や林芙美子ら、中也と近い時代の文学と新宿の関わりについても紹介しました。

〈主な展示資料〉

雑誌「レツェン」第5年6号、「行動」第3巻第8号、伊東静雄「わがひとと与ふる哀歌」



2015年 4月1日	特別展示:震災復興応援企画(前年度から継続) 東北を中心とした文学館の紹介、和合亮一、須藤洋平の詩を展示
15日	企画展Ⅰ「中原中也賞の20年」(～7月26日)
24日	第131回 中原中也を読む会 「中原中也賞の20年」見学
29日	生涯祭「空の下」朗読会(中原中也記念館前庭) 自由参加の朗読(朗読参加者54名) サンタラ コンサート
	第20回中原中也賞贈呈式(湯田温泉ユウベルホテル松政) 受賞詩集:岡本啓「グラフィティ」(思軒社) 「中原中也賞の20年—受賞詩人による記念シンポジウム」 出演:佐々木幹郎、和合亮一、三角みづ紀 ゲスト:宋敏鎬、蜂飼耳、日和聡子、神泉薫、水無田気流、 文月悠光、暁方ミセイ、細田傳造、大崎清夏、岡本啓 主催:山口市
5月22日	第132回 中原中也を読む会 屋外展示「風の詩」(前期)を読む—「はるかぜ」(吹く風を心の友と)」
6月26日	第133回 中原中也を読む会 谷川俊太郎「言葉だけに」片言を読む
7月24日	第134回 中原中也を読む会 テーマ展示「中也 折りの詩」見学
30日	特別企画展「萩原朔太郎と中原中也」(～9月27日) オープニングセレモニー開催
	からくり劇場「猫町」『アトラスの回想』 —ムットーニによる上演会①
8月8日	プロムナード・トーク① 特別企画展解説
15日	朔太郎と中也の音楽室 —朗読と蓄音器コンサート
28日	第135回 中原中也を読む会 特別企画展「萩原朔太郎と中原中也」見学
29日	プロムナード・トーク② 特別企画展解説
31日	機関誌「中原中也研究」第20号発行
9月12日	公開講演「中原中也と短歌—近代詩人と定型詩」(湯田温泉ユウベルホテル松政) 講師:東直子 共催:中原中也の会
20日	プロムナード・トーク③ 特別企画展解説
25日	第136回 中原中也を読む会 「月」の詩—中也と他の詩人
26日	からくり劇場「猫町」『アトラスの回想』 —ムットーニによる上演会②
27日	からくり劇場「猫町」『アトラスの回想』 —ムットーニによる上演会③



「空の下」朗読会
コンサート



ムットーニによる上演会

9月30日	企画展Ⅱ「中也の住んだ町—新宿」(～平成28年4月17日)
10月18日	プロムナード・トーク① 企画展Ⅱ解説
22日	中也命日、お墓参り 中也忌—墓前祭と中也に捧げる夕べ(経塚墓地、中原中也記念館)
23日	第137回 中原中也を読む会 ダダイズムの詩を読む
24日	声であそぼう—驚流狂言と詩のワークショップ (コミュニティプラザ・オアシスどうもん) 講師:米本太郎
	メイシ交換会&中也カフェ(中原中也記念館前庭)
25日	湯田街ろまん(中原中也記念館前庭) 主催:NPO法人平成DADA 協力:中原中也記念館
	一箱古本市(中原中也記念館前庭)
11月22日	プロムナード・トーク② 企画展Ⅱ解説
27日	第138回 中原中也を読む会 企画展Ⅱ「中也の住んだ町—新宿」見学
12月12日	プロムナード・トーク③ 企画展Ⅱ解説
25日	第139回 中原中也を読む会 福田名誉館長と中也の短歌を読む
2016年 1月9日	プロムナード・トーク④ 企画展Ⅱ解説
22日	第140回 中原中也を読む会 蓄音器で聴く 中也ゆかりの音楽
2月3日	公開講演「言葉で出会う—詩と人と」(山口市立阿東中学校) 講師:文月悠光
18日	開館22周年
24日	第13回テーマ展示「中也の本棚——外国文学篇」(～平成29年2月12日)
26日	第141回 中原中也を読む会 テーマ展示「中也の本棚——外国文学篇」見学
27日	山口お宝展(～4月3日)
3月1日	特別展示:文学者が語る関東大震災 全国文学館協議会加盟館との共同展 「3.11 文学館からのメッセージ」への参加企画(～3月27日)
20日	プロムナード・トーク⑤ 企画展Ⅱ解説
25日	第142回 中原中也を読む会 屋外展示「風の詩」(後期)を読む—「早春の風」「風雨」
31日	館報第21号発行



中也カフェ看板

中原中也の会

6月27日	中原中也の会第19回研究集会 「萩原朔太郎と中原中也—音とイメージをめぐる—」(前橋文学館) 総司会:加藤邦彦 講演「萩原朔太郎と中原中也」 講師:松浦寿輝 公開対談「萩原朔太郎と中原中也の歌と詩—その音楽性と絵画性について」 講師:小池昌代、阿毛久芳 協力:萩原朔太郎研究会、前橋文学館
8月25日	会報第38号発行
9月12日	中原中也の会第20回大会「詩人と短歌」(湯田温泉ユウベルホテル松政) 総司会:疋田雅昭

9月12日	講演「中原中也と短歌—近代詩人と定型詩」 講師:東直子 シンポジウム「くうた」の記憶をもとめて—詩人と短歌— パネリスト:加藤治郎、林浩平 司会:彦坂美喜子
13日	中原中也の会第16回セミナー(湯田温泉ユウベルホテル松政・中原中也記念館) 講演「萩原朔太郎自筆住所録のことなど」 講師:菅原真由美
	特別企画展「萩原朔太郎と中原中也」見学 解説:菅原真由美
12月25日	会報第39号発行



中也の命日10月22日から25日まで、「中也忌と秋のイベント4日間『秋の日の夢』」と銘打ち、様々な企画を行いました。

22日の命日は、「中也忌—墓前祭と中也に捧げる夕べ」を開催。お昼から「墓前祭」として中也のお墓参りをし、夜は記念館の前庭にキャンドルを点灯し、その灯りを背景に、閉館後の館内で「中也に捧げる夕べ」を行いました。前半は蓄音器コンサート、後半はゲストの山本浩二氏にリユートを演奏いただき、静かに中也を偲ぶ秋の夜となりました。



中也忌と秋のイベント
4日間「秋の日の夢」
平成27年10月22日～25日

23日は、山口情報芸術センターにて「中原中也を読む会」を行いました。今回は「ダダイズムの詩を読む」をテーマに作品を読み、参加者同士で意見を交換しながら詩の理解を深めてきました。

24日は、コミュニティプラザ・オアシスどうもんにて「声であそぼう—驚流狂言と詩のワークショップ」を開催。講師に山口驚流狂言保存会の米本太郎氏をお迎えして、小中学生を対象に、詩を声に出して表現することの楽しさを学ぶワークショップを行いました。参加した子どもたちは、米本氏から学んだ狂言の独特な発声法を詩の朗読に生かそうと、それぞれに工夫をこらしていました。

同日、記念館の前庭には、山口県立大学の学生が企画した「メイシ交換会&中也カフェ」が登場。来場者に中也の作品からお気に入りの一篇を選んでハガキに書いてもらい、それをスタッフの学生と交換するという、メイシ(名詩/名刺)交換会が行われました。参加者には、飲み物と手作りのクッキーをプレゼント。また、中也に扮したスタッフと記念撮影ができる企画も用意されていました。

25日は、NPO法人平成DADA主催による、詩とパフォーマンスのイベント「湯田街ろまん」を開催。特設ステージで詩の朗読や音楽ライブなどが行われたほか、会場内でカレーやジャムの販売もありました。これにあわせて、中原中也記念館主催による「一箱古本市」を行いました。近隣の古本屋や市民団体のご協力により4店が出店、店頭には様々な本が並びました。

このほか、イベント期間中、館内にて中也の最後の散文作品「西部通信」の直筆原稿と、



『出会いは？ 発見?! 感動!!
中也読本』を發行

平成26年3月、開館20周年記念事業の一環として、中原中也の詩を題材とした中学生向けの副読本『出会いは？ 発見?! 感動!! 中也読本』を発行しました。この副読本は、中原中也の生



4月には山口市内の全中学校の生徒と教員に無償配布し、ご好評を得ました。さらに、入手したいというご要望を多数いただいたため、一般向けに再編集し10月に販売開始しています。

中学生時代に戻って改めて中也の詩に出会うような新鮮な気持ちになれる一冊です。ぜひ手に取ってみてください。



誕地である山口市の子どもたちが中也の詩に親しむ機会を作ることを目的としたもので、国語の授業や特別活動等で活用していただくほか、自宅に持ち帰って深く読み込むことができ、卒業後も本棚に並べておけるような一冊を目指して、編集・制作したものです。

全体は「知っちゃう? 中也」、「読んじよる? 中也」、「深いねー中也」、「もっと知りたい! 中也(資料編)」の4章に分かれ、山口市内の中学生へのアンケートで好きな詩として選ばれたものを中心に、30篇の中也の詩を紹介しています。それぞれの詩には中学生の感想や編集者からのメッセージを添え、谷川俊太郎さん、文月悠光さんの書き下ろしエッセイも収録しています。

◎第21回中原中也賞

『用意された食卓』

カニエ・ナハ氏



第21回

21回の中原中也賞は、公募および推薦による174詩集の中から、カニエ・ナハ氏の『用意された食卓』（私家版）が選ばれました。

カニエ氏は昭和55年生まれの35歳（受賞時）。第19回『オーケストラ・リハーサル』、第20回『MU』に続き、3年連続で最終候補詩集に選ばれ、今回の受賞に至りました。選考会では、三度目のノミネートでの受賞となったことについて、その持続力と発展性が高く評価されました。

受賞作『用意された食卓』には、昨夏、平成27年5月から8月にかけて書かれた詩25篇が収録されています。カニエ氏は「不穏な時代に、危機を危機と感じられるうちに、楔を打っておきたい」（受賞時のコメント）という思いにより制作した詩集であると述べています。

島

ここはまだ、
夜しかなかった昔へと、
霞から霧へと、
百年も流れ、
故郷に戻り
死後に写真は切斷された。
埋めた、
わずかに
寝ていた山に
持ち帰り
水に、
この身を寄せ
壊れたり廃棄されたものことだけ
静かに話す
（光は、なぜ、私たちに、与えられ、
いま、ふたたび、奪われようとして
いるのか。）

Chuya
Nakahara
prize
21st



カニエ・ナハの『用意された食卓』は、抽象的な戦争をテーマとして、それを弱者の位置から追い詰めている。また、その言葉の運動には、異化と同化の効果のバランスがいい。作者はもちろん戦争を知る世代ではないが、戦争のイメージに客観性を持たせると同時に、死者そのものになりきろうとする言葉の足どりと、切迫感がある。（選評より）

◎平成28年度 記念館事業・関連行事予定

2016年4月-2017年3月

展示	イベント	中原中也を読む会
平成27年度企画展Ⅱ 「中也の住んだ町-新宿」 （平成27年9月30日～平成28年4月17日）	湯田温泉 白狐まつり （4月2日、3日）〈無料開館日〉	毎月 第4金曜 中原中也記念館等
第13回テーマ展示 「中也の本棚——外国文学篇」 （平成28年2月24日～平成29年2月12日） ※特別企画展会期中を除く	生誕祭 空の下の朗読会 （4月29日 中原中也記念館前庭）〈無料開館日〉	中原中也の会 中原中也の会第20回研究集会 （6月12日 東京学芸大学）
企画展Ⅰ 「DADA 1916→1923 ツェラそして中也」 （4月20日～7月24日）	こどもの日 （5月5日）〈無料開館日〉	中原中也の会第21回大会 （9月17日 セントコア山口）
特別企画展 「太宰治と中原中也」 （7月28日～9月25日）	中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ （10月下旬）	中原中也の会第17回セミナー （9月18日 セントコア山口・中原中也記念館）
企画展Ⅱ 「中也、この一篇——「サーカス」」 （9月28日～平成29年4月16日）	中也命日・お墓参り （10月22日）〈無料開館日〉	開館23周年 （2月18日）
第14回テーマ展示 「私が選ぶ中也の詩」（仮） （平成29年2月15日～平成30年2月下旬）		※日程等、変更の場合がございます。

中原中也記念館 館報【第21号】平成28年3月31日

発行◎中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉一丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙は再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。